慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	はじめに(記憶としての建築空間：イサム・ノグチ/谷口吉郎/慶應義塾)
Sub Title	Preface(Architectural Space as Memory : Isamu NOGUCHI, Yoshiro TANIGUCHI, and Keio University)
Author	前田, 富士男(Maeda, Fujio)
Publisher	
Publication year	2005
Jtitle	Booklet Vol.13, (2005.) ,p.5- 8
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000013-04211342

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

建築とは、大地のうえに一本の柱をたてること、すなわち「世界の軸（axis mundi)」をさだめることから始まる。天と地と地下を結ぶ接点としての柱。神話学・宗教学のミルチャ・エリアーデをひくまでもない。そして、世界の軸たるこの柱は、花崗岩でも樫材でも、そして鉄でもありうる。とすれば、そもそも建築家の仕事と彫刻家の仕事は選ぶところがない――そう考えてよい。

慶應義塾は1951（昭和26）年、彫刻家イサム・ノグチと建築家谷口吉郎との共同制作になる「萬來舎（第二研究室)」とそのノグチ・ルーム（談話室・庭園・彫刻作品の総称）の完成を祝った。「近代」は、あらゆる活動の根拠に先端性と革新性を求める以上、領域をこえる共同性を原理的に回避する。純粋な部分の操作であればこそ、先導たりうるからだ。それゆえ、物理学者の数学と統計学者の数学とは異なり、建築家にとっての空間と彫刻家にとっての空間とは異なることになる。萬來舎／ノグチ・ルームは、こうした近代の本質的危機に対峙し、それを克服しようとしたふたりの芸術家による傑出した共同作品にほかならない。

慶應義塾は、第二次世界大戦中の空襲によって三田地区の建築・施設に甚大な被害を蒙り、また、三田の丘に帰還すべき多くの塾生を戦場に失い、深い喪失の想いに沈んでいた。塾長潮田江次のもと、1947（昭和22）年の慶應義塾創立九十周年を機に、そうした空白の時間に終止符をうち、ふたたび新しいキャンパスに若き血をよみがえらせる建築空間が生まれようとしていた。1949年4月に図書館（現・旧図書館）の修復工事が終了。新築の五号館、四号館（のちの第三校舎)、学生ホールは同年1月、5月、11月にそれぞれ竣工した。これらの新建築を担ったのが谷口吉郎で、その慶應義塾大学四号館、学生ホールは、現在も建築界の伝統として名高い日本建築学会賞の第一回受賞作品である。

萬來舎（第二研究室）は、設計谷口吉郎、施工安藤組で1951年1月に着工され、8月に竣工した。萬來舎は、鉄筋コンクリート造2階建で、教授室・事務室とともに、1階玄関南側にイサム・ノグチの制作になる談話室を備え、また玄関外側のキャンパスに彫刻《若い人》、談話室西側の庭園に彫刻《無》と《学生》を配している。庭園デザインおよび彫刻3点もノグチの手になる作品である。

建築家谷口吉郎（1904-79）はわが国のモダニズム建築の開拓者で、慶應義塾日吉寄宿舎（1938)、藤村記念堂（1947）から東京国立近代美術館（1969）にいたる作品で知られる。イサム・ノグチ（1904-88）が世界的に評価の高い彫刻家であり、またユニヴァーサリズムを主導した近代芸術家としてますます注目を集めていることは、強調するまでもない。とりわけ建築や庭園と統合されたノグチの彫刻作品は、環境造形作品として強い主張をもつ点で、ポスト・モダニズムを迎える現代社会にあっても、ますます評価の気運が高まっている。

本号は、イサム・ノグチの生誕百周年を記念する「ノグチ・ルーム」特集である。記念催事は世界各地で行われ、今後も展覧会や出版など多彩な企画が続く予定だが、その一翼を本誌が担いうれば、これにまさる喜びはない。むろん、谷口吉郎も同年の生まれだから、本号はまた、第二研究室ほか慶應義塾の第二次世界大戦前後の建築環境の発展に貢献した建築家谷口吉郎に記念の意を表した特集でもある。とはいえ、ノグチに大きく照明をあてたのは、2002年から2004年にかけて萬來舎／ノグチ・ルームという空間がいわば消滅の場面を迎え、いかにこの問題に対処するのか、という芸術作品の保存、文化財の保護の問題が慶應義塾に生じたからである。

「ノグチ・ルーム」はもとより建築空間ではあるものの、イサム・ノグチの手になる彫刻・木工家具・照明・工芸デザイン・庭園を統合する、いわば総合芸術的作品で、ノグチの作品としても、また20世紀の造形としても、きわめて貴重な空間作品なのである。この作品を保存するのか、あるいはしないのか、もし保存するとしたら、いかなる方法をとるのか——こうした課題に慶應義塾は直面することとなった。

わが国は19世紀以降、近代化の道を急ぐあまり、都市空間の歴史性、建築のもつ記憶、文化財の継承といった問題に反省と思索をめぐらす伝統をもっていない。そうした状況であれば、慶應義塾が直面した「ノグチ・ルーム問題」は実は、まことにささやかながら、日本近代がやむなく、あるいは意図的に忘失してきた重要課題のひとつ、つまり文化的記憶問題の出現にほかならなかったと考えてあながち検討はずれでもない。

フランス革命二百年を記念して1984年から8年間をかけて編集された巨大な集合的記憶論というべきピエール・ノラ編纂『記憶の場——フランス国民意識の文化＝社会史』(1992) や、ドイツのヤン・アスマンによる『文化的記憶』(1992)、またミーケ・バルほか編『記憶の行為』(1999) など、1990年代から世界の知的シーンの焦点となってきた「記憶」に、いまここで言及するのも気後れするほどだ。だが、現代人がそうした文化的「記憶」に照明をあてざるをえないのは、グローバリゼーションやインターネット環境の急激な拡大に直面して、ナショナリズムやパブリック・スフェア（公共圏）の検証が急務になっているからで、そうした事態だけは少なくとも確認しておこう。パブリック・ドメインという用語は現在、ＩＴ環境で著作権を放棄した「公有」を意味するけれども、こうした概念は同時に、ユルゲン・ハーバーマスの提起した公共性問題をいつだって反照しているのだ。著作権をめぐるＩＴ専門用語としてしか理解しえないのが、わが国の貧しい状況なのである。

「記憶」という語を本特集号のタイトルにすべりこませたのは、文化的記憶をめぐる問題関心の一歩となれば、という気持からである。いささかの逸脱をたしなめる向きもあるにちがいない。しかし、三田の丘でイサム・ノグチが人

びとの集まる小さな「アゴラ（広場）」を希求した以上、また、福澤諭吉が「社中」という公共性の理念を重視した以上、文化や芸術を公共性の記憶として把握することは、われわれの義務以外の何ものでもない。

萬來舎／ノグチ・ルームの問題を簡単にふりかえっておこう。慶應義塾大学は、法科専門大学院開設（2004年4月）のために、2002年1月に新大学院環境整備検討委員会（委員長吉田和夫理事）を組織した。同委員会は新校舎構想を検討した結果、三田地区に約五千坪の施設を整備することとし、三田地区の大学正門前、花市場跡、東館隣地、西校舎隣地の候補地のなかから西校舎隣地を新校舎用地とすることを決定した。西校舎隣地とは、演説館・消防署・中等部側道路・西校舎に囲まれた西校舎南側部分の台地上下・斜面部分である。この台地上部には、萬來舎（第二研究室）とその庭園部分が存在し、2002年度時点では、萬來舎内には1階に国際センター、日本語・日本文化教育センター、ノグチ・ルームが、2階に言語文化研究所、個人研究室がおかれていた。新大学院環境整備検討委員会は、新校舎建設（2005年4月供用開始予定）に関してコンペティッション方式を決定し、2002年3月22日にコンペティッション説明会を実施、4月に一次審査を実施して3社案を採用、5月に3社ヒアリングの後、6月に大成建設社案を採用した。慶應義塾が採用した大成建設社案は、新校舎建設のために第二研究室を解体し、第二研究室1階部分のノグチ・ルームおよび庭園部分（イサム・ノグチの彫刻3点《無》、《学生》《若い人》を含む）を新校舎の西側ルーフ・テラス部分に移築する計画である。

学内では、6月25日に新校舎説明会、つづいて8月8日には新校舎建設基本計画に関する全体説明会が開催された。説明会とともに、萬來舎とノグチ・ルームを原状保存する要望の声があがり、10月には慶應義塾に対して保存要望署名活動が展開して国内外の専門家また一般の方から支持をえた。アート・センターでは鷲見洋一所長がいち早く6月3日に黒田、吉田両常任理事宛に要望書を送り、急ぎイサム・ノグチ芸術に通じた学外の専門家やニューヨークのイサム・ノグチ財団と連絡をとるように要請した。

他方、慶應義塾は7月に、大成建設社案を前提として問題点、改善点を検討する作業部会「ノグチ・ルーム保存ワーキング・グループ」を組織した。筆者前田が座長に任命され、多数の専門家との討議をへて12月に「活動報告ならびに答申」を提出し、このグループは活動を終了した（この報告書の内容ほかについては、『慶應義塾大学アート・センター年報10』2003年4月刊、掲載の鷲見洋一と前田による二論文を参照）。2003年3月には慶應義塾大学教員による「新萬來舎・ノグチルームの保存を求める会」（代表世話人河合正朝、松村高夫）が発足し、大学側に要望書を提出する一方、その主要な会員は彫刻作品の著作権者であるアメリカのイサム・ノグチ財団とともに、ノグチ作品移設中止を求める仮処分を東京地裁に申請した。6月にこの申請は却下された。6月末より萬來舎の解体工事が開

始。以後、新校舎の建築が進展し、ノグチ・ルームの移設は当初案に即して進められたが、2004年秋にあらたに室内空間については建築家隈研吾氏が、庭園部分に関してはフランスの環境デザイナー、ミシェル・デヴィーニュ氏が新デザインを担当することとなり、移設内容に変更が加えられることになった。新校舎は、2005年3月中旬には竣工の予定である（こうした経緯については、巻末の年表を参照していただきたい）。

本特集では、第一部では萬來舎／ノグチ・ルームの成立過程についての諸側面を藤岡洋保氏、由良滋氏、森仁史氏、柳井康弘氏に、第二部では解体前のノグチ・ルームの空間論を新見隆氏、熊倉敬聡氏に、第三部では新校舎建設とノグチ・ルームの保存について、慶應義塾の見解を常任理事吉田和夫氏に、新校舎の設計理念を芝山哲也氏に、保存運動の立場を河合正朝氏にご寄稿いただいた。第四部は筆者前田による美術史学的考察である。編集者として、新資料新知見の紹介や重要な指摘を含む貴重な論考をお寄せいただいた執筆者すべてにあつく御礼を申しあげるとともに、とくに第三部の執筆者三名の方々には、歴史的建造物や芸術作品の保存をめぐって相互に意見を戦わせた立場にありながら、こころよくご寄稿いただいたことに記して敬意と謝意を表する次第である。

末尾に、附記しておきたい。まず、本特集の核心をなす建造物の名称である。谷口吉郎の設計になる建築物は、学内では成立時から「第二研究室」という名称が採用されてきたが、2000年になって「萬來舎」と改称された。この建物内の談話室は、「ノグチ・ルーム」と呼ばれてきた。本特集では、解体前の2002年度の慶應義塾内での正式呼称にしたがって「萬來舎」と「ノグチ・ルーム」を使用する。とはいえ、1951年の竣工時に、第二研究室棟もしくは談話室については「新萬來舎」という名称も学外の建築誌などでは使用されていた。また萬來舎そのものが最初に慶應義塾内に設置されたときから、建物の固有名称ではなく、千客万来に由来するサロン的機能をさす概念でもあったようで、学内の呼称対象も一定していない。また表記も万来舎、萬来舎など複数の慣例がある。本特集では、執筆者の方々の要望もあり、必ずしも統一を試みてはいない。第二に、掲載の各論考については編集上の観点から協議した点もあるが、原則として執筆者の見解を重視した。以上二点に関し、ご了承をあらかじめお願いする次第である。最後に、萬來舎／ノグチ・ルームのより良き問題解決のためにご尽力いただいた彫刻家・武蔵野美術大学教授黒川弘毅氏ほか学外の多くの関係者、また慶應義塾管財部長紺野美英氏ほか学内関係者に謝意を表する次第である。

慶應義塾大学アート・センター所長　前田富士男